

明治21年3月8日(陰暦正月26日)、教祖一年祭の執行に際して、人々は大きなふしに直面した。年祭当日、午前5時から「かぐらづとめ」が勤められ、引き続き「十二下り」も勤められたが、年祭の祭典に取り掛かろうとした時、大神教会の人々がやってきて祭典の中止を命じたのである。その後、大神教会の人々はいったん退出したが、祭典の再開直後に樺本分署の巡查8人が土足で乗り込んできて、そのまま一年祭を中止してしまった。以降、人々は教会公認について改めて真剣に考えるようになる。こうした流れをふまえながら、その頃の増野正兵衛に関する「おさしづ」についてみていきたい。

- ・明治21年2月21日(陰暦正月10日):増野正兵衛口中左の内裏一寸腫れ居所悪しきに付伺/同日帰国伺
- ・3月11日(陰暦正月29日):増野正兵衛転宅後々々内々心得伺/同日、増野松輔足袋職教えるに付伺
- ・4月6日(陰暦2月25日)朝:増野正兵衛齒浮き、居所障り伺
- ・4月9日(陰暦2月28日):眞之亮不在中おぢばへ巡查踏み込み来り、寄留なき故厳しく言うに付、増野正兵衛国々所々へたすけに行つて宜しきや、おやしきに踏み止つて宜しきや伺

明治21年2月21日、増野正兵衛は「口中左の内裏一寸腫れ居所悪しき」について神意を伺っている。「先ずへ内々事情、一つ事情何でも安心さし、見る処一つ思案、幾々幾年々理を見て思案、余儀無き一場も立ち越え」と、内々の事情について「何でも安心」させながら、年々に現れてくることを見て思案し、やむを得ない場合も乗り越えるようにと諭されている。また、「どういふ事一つ種十分下ろせ。直ぐとせば直ぐと生える。大抵作り上げた。一つ際に雨風が吹く。一年毛上ほんに良かった日あったな」と、内々の事情について実りある日を楽しみに真実の種を蒔くように促されている。また、同日、正兵衛は神戸への帰郷に際して「案じる道は無いで」とのお言葉も頂いている。

さて、3月8日、上記の教祖一年祭のふしが起きた。人々は、翌日9日に「おさしづ」を伺っている。押して「天理教会設立」についても伺っており、正兵衛にとっても「教会設立」は大きなテーマとなっていたであろう。

そうした中、正兵衛自身の事については、2日後の11日に、「転宅後々々内々心得」について「おさしづ」を仰いでいる。住居の移転については、1月24日、2月10・11日の「おさしづ」ですでに許しは得ており、その後、実際に転宅したのであろう。一カ月ほど経って、改めて「内々」の「心得」を伺った。すると、「一つ道心定まり心鎮め、心を治め安心さしづして置く」と、理を聞いて、心を治めて通れば安心であることが伝えられている。また、同日、増野松輔(正兵衛の姉・まちの長男)の「足袋職教える」についても伺っている。「先々どういふ定め、速やか心定め」と、おそらく足袋職に関する事以上により広い文脈で、先々を見据えて心を定めるように促されている。

それから約1カ月後の4月6日、正兵衛は再び口中の齒の障

り(齒浮き)と「居所障り」について神意を尋ねた。「世上の楽しみ一つ聞く。多く中ざつと一つ安心何故ならん。日限十分の道を知らそう」と、おそらく正兵衛の周りの者たちに対して「世間的な楽しみを聞き、いろいろ考える中でなぜ安心できないのか、日限を仕切って十分安心できる道を知らせよう」と諭されている。正兵衛の家内の者にしてみれば、神戸という繁華な町に住んでいることも、おぢば移転を躊躇する大きな要因の一つではなかったろうか。

一年祭のふし後、初代真柱をはじめ要職にあった人々は東京に赴き、教会公認に向けて奔走していた。そうした中、おぢばでは、4月9日に巡查が踏み込んでくるという事態が起き、真柱不在の中、正兵衛はおぢばに留まるべきか、おたすけに出るべきか、神意を伺っている。「心待って居る人も所々一寸聞く」と国々所々で待っている人々にふれながらも、「又一つぢば、一時処、細い楽しみだんへ重ね重ね処、一寸通り難い」と、ぢばの事情も治めるように諭されている。

「口」と「齒」

さて、『身上さとし』では、「口」の項目で増野正兵衛の2月21日の「おさしづ」を取り上げて、「年々に見えて来る理を見て思案し、のるかそるかという内々(家内)治まらん、どんと定めにくい、余儀ない場合を克服して、種子を十分におろせば、すぐに生えて来るという意味で、口中左の内裏一寸はれたのは内々神一条の精神を治めよと指示されたのである」と説明している⁽¹⁾。また、「齒」の項目で4月6日の「おさしづ」を取り上げて「齒浮くのは、家内の者の心がそれぞれ違って一手一つを欠き、落ち着かないのはいけぬ。と指示していられるのであろう」と述べている⁽²⁾。

ここまで見てきた文脈で言えば、正兵衛の「口」や「齒」に関する「おさしづ」では、正兵衛をはじめとする家内の者に対して、世間的・一時的な楽しみではなく、長い目で見たときの「安心」について伝えられているように思われる。一見すると正兵衛の身上の障りとは関係のないように見える転宅の心得や、松輔の足袋職に関する「おさしづ」でも、やはり「先々を見据えた安心」について諭されていた。また、見逃してはいけないのは、2月21日、4月6日ともに、「口」や「齒」だけではなく、「居所障り」についても伺っている。「居所」は、「居場所・住まい」を示すとされるが、おそらくこの時期の「転宅」だけではなく、おぢば移転の心定めを忘れないように「居所障り」を与えられていたのではないだろうか。

「先々を見据えた安心」は、より広くは、教祖一年祭のふし・教会公認運動という文脈でも考えられよう。当時の人々にとっては、眼前の状況はとて「安心」できるものではなかった。転宅の心得に際して伺った「一つ道心定まり心鎮め、心を治め安心さしづして置く」という言葉が印象深い。

[註]

(1) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、90頁。

(2) 同書、109頁。